

この過程には数ヶ月かかるのが普通だが、一度だけ、二年以上にわたって執筆者とメールのやり取りをしたことがある。

執筆者は英語が母語でなく、また少々難しい理論を使っていたので、原稿の内容には不透明なところもあった。ただ、お互いにとって非常に有意義な、長いやり取りであった。手を組んで修正していったその原稿は素晴らしいものになった。これこそは編集作業の醍醐味だ。執筆者とのコミュニケーションがもっとも密接なのは初校が出るまでだが、再校でも執筆者が修正したい箇所があればなるべく受け入れる。編者も再校の段階になって新しい問題点に気づくこともある。三校は編者だけが見る。

最後に、一冊のJ Rが世に出るまでには、日文研内にある出版編集室の貢献は欠かせない。出版編集室のスタッフは縁の下の力持ちである。彼女らに、初校・再校・三校のゲラの作成、原稿全体のスタイル（文体）のチェック、印刷会社・デザイナーとの連絡などを担当してもらっている。この編集体制の継続は、J Rの将来にとって死活問題である。（次号では、編者が着任してから試みたJ Rの様々な改革について紹介する。）

（国際日本文化研究センター教授）

感謝をこめて

阪口望み

私の一日は、まず手帳を開くことから始まります。小松所長が就任された日から今日までずっと、この一日の始まりは変わりません。新年度ごとに買い換えた手帳は、すでに四冊目も終わろうとしています。

私の仕事はおもに所長の予定の管理、多方面からの依頼の調整が中心です。毎日の所長の予定はもちろんのこと、原稿や回答の締切日、よくやりとりをする方たちの連絡先など、必要なことはすべて手帳に書き込んでいますので、これほど私にとって大切なものはありません。そして今、どの手帳のどのページをめくっても、すぐにそのときの場面を思い浮かべることができます。それほど、所長秘書としての四年間は印象的な毎日でした。

小松所長にあてて日々、所外・所内含め多方面から講演や執筆の依頼、会議の日程調整などの連絡をいただきます。そういった依頼を受けたらまず所長のご意向を確認し、それから相手方との調整に入ります。その際私がいとも気をつけ

ていることは、依頼をお引受けする場合でも、残念ながらお断りせざるを得ない場合でも、私の言動ひとつでその後の所長の印象をよくも悪くも変えてしまうということです。私はこの仕事をするうえでこのことをとても大切に思い、毎日忘れることなく心がけてきました。

秘書業務は総務業務の延長線上にある、と私は考えています。まずは所属する団体全体のことを理解し、広い視野をもったうえで、ある一人の方（職場によっては複数の方の場合もあると思いますが）のお仕事を支えること。総務業務をこなせなければ、秘書業務は務まりません。

実はこれまで、秘書業務単独で働いた経験はありませんでした。本業務をもちながら、その合間に秘書業務のようなこと、という程度でしか触れたことのない世界でしたので、最初は本当に手探りの毎日でした。しかし幸い、総務業務の経験は十分にありましたので、今までに得た知識や経験にさらに細かく枝葉をつけていく、という感覚で、ひとつひとつの業務に丁寧に取り組むよう努めました。

総務の仕事とは、まず、内部のすべての部署間はもちろんのこと、内部と外部との取り次ぎを円滑にすること。問い合わせを受けたとき、その人が何を欲しているのかをすぐに判

断し、要望に的確に応えること。そのために、いつ誰からどんな要求がきても応えられるよう、手が空いていなくても、ふりをしてでも手は空けておかなければならないこと。その集団の顔であることをつねに意識しておくこと。これらは、初めて総務職に就いたときに先輩方から教えられたことです。

「総務」というと、誰でもこなせる業務、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。実際、語学などの資格は、あれば便利、程度のもので必須ではありませんし、複雑な業務もありません。ですがなにかに特化する必要がないぶん、まわりで起きているどんなことにも敏感に目を向け、幅広い視点・知識をもちながら、総合的に迅速な判断を下すことが求められます。自分自身が業務を抱えこんでしまつて自分のことに夢中になるあまり、まわりを見る余裕を失ってしまう。これでは業務が成り立たないのが総務です。

秘書職はそういうった総務業務をふまえたうえで、仕事の範囲は限定的になりますが、特定の方と密に接することになるため、すべての業務をバランスよく保つことがより大切になってきます。所長をはじめ、各方面からの要望に最短の時間で応えるにはどういった手順が最適なのか、仕事を頼みや

すい雰囲気を作るには日々自身がどうあるべきなのか。この仕事以上に、自分を見直す機会を与えてくれた仕事はなかったかもしれない。おかげで今の自分に足りないもの、これからの自分に必要なものを見いだすことができ、今後の自分にとっての選択肢が増えたことは、とても大きな自信になりました。

もちろん、納得のいく仕事ができなかったこともたくさんあります。自分自身で出した答えに、未だに疑問が残っていることもあります。白黒つかない答えを出すことが苦手な私にとって、そうせざるを得ない場面に出くわしたときはとても苦痛でしたし、逆にそういった答えを与えられて憤りを覚えたこともありました。合理的ではない答えに涙を滲ませる同僚と、一緒に悔しさを共有したこともありました。しかし

そんな経験も、今となっては私が新しい一步を踏み出すための後押しをしてきています。

所長秘書として四年という長い時間を乗り切ることができたのは、ほかならぬ小松所長のお人柄、その所長を囲むみなさん、そして頼もしい先輩方や同僚に恵まれ、たくさんの方々に助けられたからです。妖怪についても多少詳しくなることができ、毎日楽しく仕事をさせていただきました。

私はこの三月で日文研を去ります。所内、所外に関わらず、たくさんの方々と出会えたことに心から感謝しています。私と少しの間でも関わってくれたみなさん、ほんとうにほんとうにありがとうございます。

（国際日本文化研究センター総務課総務グループ

総務係パートタイム職員）